

おおいた 法の海

第 48 号
 発行所
 浄土真宗本願寺派
 大分教区基幹運動推進委員会
 〒874-0920 別府市北浜3丁目6-36
 本願寺別府別院内
 T E L 0977 - 22 - 0146
 F A X 0977 - 24 - 7831



教区「子どもの集い」

いのちをいただく

6月に入り、段々暑さと湿気が気になる時期になってきました。すでに台風が日本をかすめそうな時もあり、今までの季節感とは違うようなそんな感じがいたします。

4月の頃の話なのですが、庭にある桜の木が大きくなりすぎて、根っこが石垣を押ししている状態になっていました。それで、何十年と教円寺の庭に咲いていた木ですが切ってもらうことになりました。

木を切ってもらうのは1日で済んだのですが、切られた跡をみると、「この桜の木の何十年という時間」を自分たちの都合で奪った、その事を突きつけられているようでした。

「いのちを頂く」ということは、なにも「食べる」だけでなく、生活をして生きていくこと全てに関わってくるのだなと感じたことでありました。

食べ物という名の動物はいません、雑草という名の草はありません、阿弥陀さまは全ての生きとし生ける命に「必ず救うぞ」と願いをかけて、喚びかけ続けてくださっています。

そう考えると、この私は本当に全ての「おかげさま」によって生かされているのだなと気付かされる出来事でありました。

(耶馬溪組教円寺住職 佐藤 哲英)

某月某日、某寺にて。

A子 御院家さん、こんにちは。明日のお葬式では、お世話になります。

住職 A子さんは隣保班だから、朝から準備に行かれるんでしょう。

A子 はい。ところで、お葬式のお包みは「御霊前」で良かったですよ。

住職 「御霊前」は良くないです。

「御霊前」とは

書かない

A子 あら、先日買った本には「御霊前」が良いと書いてあったんですけど……。四十九日が済むまでは「御霊前」で、それ以後は「御仏前」にすると書いてあったと思うんですけど。住職 亡くなられた方が霊になつて浮遊している、あるいは仏になれずに迷っていると考えるなら「御霊前」でしょうけど、浄土真宗では故人は阿弥陀さまのはたらきでお浄土に生まれて仏さまになられると考え、そのこ

とを阿弥陀さまに感謝してお供えするわけですから「御仏前」です。

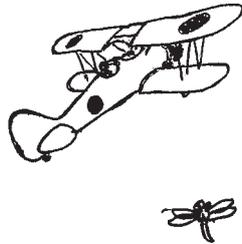
A子 ああ、なるほど。じゃあ浄土真宗だけが「御仏前」で他の宗派は「御霊前」にすれば良いということですか。

住職 他の宗派の方がどう言っ

ペンペン草の境内地

②お包みの表書き

お包みにすると
知覚のよさを
赤としほが
怪しいぞ



知覚のよさを
赤としほが
怪しいぞ

故人への

お供えではない

A子 なぜ「御霊前」が一般的に用いられるようになったのでしょうか。

住職 明治以来の神道国教化政策の影響もあるかもしれませんが

とでは到底仏になれない私を見

抜かれた阿弥陀さまが、私をお浄土に生まれさせ仏にしようと

はたらいてくださっているわけですから、あくまでも礼拝や供養の対象は阿弥陀さまということになります。

A子 浄土真宗って、なんだかとってもスッキリした考え方をするんですね。

住職 「門徒物(忌み)知らず」と言つて、崇りを恐れてするような世間の物忌みの習慣を気にせず、仏さまとの関係性の中で主体的に判断する伝統があります。

昔はお香を

持参していた

A子 とところで「香典」という表書きもありますが、あれはどのような意味ですか。

住職 最近は葬儀社さんなどがお香を準備するようになっていますが、昔は参拝者が自分でお香を持参して焼香していました。そのお香を供える習慣の名残があつて、お包みの表書きに「香典」や「御香資」と書くようになったのでしょ。

掲示伝道

簡易法語掲示板

【大海組 専想寺】



仏様が掲示伝道に取り組み始めて二十五年近くになるそうです。当初は、山門と裏門のほかに十ヶ所。現在では六十八ヶ所に設置されており、言葉は、年度初め仏社の総会で、会員からの応募など住職と相談し、一年間の言葉を決め、月始めに会員四・五名がお寺に集まり、書いておられます。

毎月の例会で、会員が持ち帰り各自の責任箇所二十五日に張り替えられるそうです。漢字全てにかなづちしてあるのにあたたかさを感じました。

日常の中の仏教(5)

東 光 爾 英



も焚かれるもので、葬儀や法事だけに焚かれるものではありません。

から中央アジア、中国、日本へと仏教の伝播とともに伝えられました。天平時代にも鑑真和尚が、薬として中国からもたらしたと伝えられています。さらに、室町時代には、東山文化の華とされる香道へとお香は発展してゆきます。

たちに、言葉ではなく、体から香りを放つことによって説法され、菩薩たちはその香りを「聞いて(かいて)」、悟りのよさ喜びを得ると説かれています。私たちは、例えばバラの香りから甘いとか淡いとか、言葉で説明してもらっても、実際にバラの香りをかいてみなければ、香りそのものを知ることができません。仏に成ることもこれと同じで、悟りそのものを言葉で言い尽くすことはできない、衆香国の菩薩たちは優れているから、香りの説法によって悟りそのものを得ると説かれています。お香をかぐことは、私たちに悟りそのものはわからずとも、仏に成る大切さを心の耳で聞くことを意味しているとも言えます。

と、言葉の説法によってさえ悟ることのできぬ私を、阿弥陀さまは必ず仏にさせるとはたらき続けておられるが、それはあたかもお香によって染められてゆくように、私がお念仏の行者として染められてゆくようである、それを受け止め慶ぶとき、仏の香しい智慧の光りがかざられているといわれるのだ、と讃えられています。

【お香】

このまえ、私のお寺の本堂で、「お香に親しむ会」が開かれました。香道のお師匠さんのご指導のもと、三十名ほどの出席者が、何種類かのお香をかいて当てるゲーム、いわゆる

もともとお香は、暑いインドで香を焚いたり体に塗ったりして、臭いを消す礼儀として用いられていたようです。しかし、仏教の作法にこれを取り入れられ、深い関わりをもって日本に伝えられました。

仏教では、抹香をくべる焼香だけでなく、線香を燃やす燃香や含香・塗香・献香などの作法があり、お香によって法要が始まり、お香によって終わるので

す。

お香を焚くことは、汚れを払うためでもなく、まじないでもありません。浄土真宗では、お香は阿弥陀さまの私へのはたらきを讃え、み教えを聞いて、お念仏が身につけてゆく慶びを味わうという重要な意味があることを知るべきであります。

「香席」をして楽しみました。

お香の種類はかなり多くありますが、その原産地はインドや

熱帯の東南アジアに限られています。ある樹木が土に埋もれ、

長い年月の末にたまたま掘り出され、腐らずに残った部分を削り取ったものがお香なのです。

また、組内のお寺さんの継職法要(新しい方がご住職を継ぐお祝い)でも、すばらしいお香が焚かれていました。お香をかいた瞬間私の心は、すがすがしさとともに、慶びの気持ちでいっぱいになりました。

このようにお香は、香道という文化として、慶びの法要に

「カーラグア黒い香」「伽羅(きやら)と呼び、高価なものとなっています。他にも白檀(びやくだん)、麝香(じゃこう)など

が有名ですが、これらはインド

から中央アジア、中国、日本へと仏教の伝播とともに伝えられました。天平時代にも鑑真和尚が、薬として中国からもたらしたと伝えられています。さらに、室町時代には、東山文化の華とされる香道へとお香は発展してゆきます。

お香について、「維摩経」という経典に興味あることが説かれていきます。この経は維摩という在家のすぐれた人が病気を装い、見舞う人々に佛法を説くという内容です。その中、彼を見舞うおしゃ力様の弟子との問答のうち、「衆香国」というお浄土の話が出てまいります。

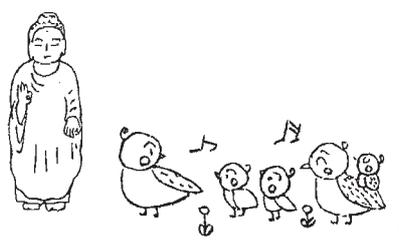
衆香国は、建物も、食べ物も何もかも「香り」でできているばかりか、「言葉」さえ無い悟りの世界だといっています。そこでは、「香積如来さま」が菩薩

たちに、言葉ではなく、体から香りを放つことによって説法され、菩薩たちはその香りを「聞いて(かいて)」、悟りのよさ喜びを得ると説かれています。私たちは、例えばバラの香りから甘いとか淡いとか、言葉で説明してもらっても、実際にバラの香りをかいてみなければ、香りそのものを知ることができません。仏に成ることもこれと同じで、悟りそのものを言葉で言い尽くすことはできない、衆香国の菩薩たちは優れているから、香りの説法によって悟りそのものを得ると説かれています。お香をかぐことは、私たちに悟りそのものはわからずとも、仏に成る大切さを心の耳で聞くことを意味しているとも言えます。

さらに浄土真宗のよりどころ「大無量寿経」では、阿弥陀さまのお浄土の莊嚴、私たちにたらき続けるお徳をたたえるお飾りとしてお香が説かれています。親鸞聖人もご和讃に

染香人のその身には
香氣あるがごとくなり
これをすなはちなづけてぞ
香光莊嚴とまつすなり

(注釈版五七七頁)





ビハール法話

『雑感』

速見組善正寺住職

薬師寺哲雄



「ビハール」(Bihar)とは、古代インドにおいて仏教経典の記録などに使用されたサンスクリット語で、「精舎・僧院」「身心の安らぎ・くつろぎ」「休息の場所」を原意とします。

本年一月杵築妙徳寺ご住職のお誘いで、はじめてインド八大仏跡巡拝の旅をさせていただきました。成道の地ブツダガヤの地に立つマハーボーディー寺院の大塔や、仏教教団発祥の地「初転法輪を後世に伝えるために建てられたダメークの塔などの前に額づき、参拝団全員でお勤めをさせていただき大きな感動でした。

まず。王舎城もこのビハール州に位置しており、マガダ国の首都でした。

アシヨーカ王が統治したマウリヤ朝の首都パタリプトラは現在の州都であるパトナにつながっています。現地ガイドの説明では、ビハールというのはビハールの英語音で、ビハールが州の名となったのは、この地が寺院つまりビハールが多く建立され仏教が栄えていたことによるとのことでした。

説かれた靈鷲山を拝することができず。王舎城の悲劇は釈尊の晩年に起こりました。王のピンバシヤラ王は、釈尊と同年齢で、成道直後の釈尊に帰依し、竹林精舎を寄進し、三十五年間釈尊とともに歩いてきた教団の大檀越です。つまりアジャセ王は熱心な仏教徒の家庭に誕生し育っているのです。

この旅行で、僧侶は仏跡で順番に法話をせよとのこと、私は王舎城の牢獄跡が当番でした。「観無量寿経」が説かれる機縁となった悲劇の舞台です。ここから向こうに「大無量寿経」が

しりとした「安住」の境地におられたのでしよう。ところが「大経」の説法のと王舎城の悲劇が起こっているのです。もつひとついつと、「法華経」の説法中での事件です。事件は教団の存続を揺るがし、それ以上に仏教の真実性を問うたのではないのでしょうか。というよりこの一大事件があったればこそ、仏教の真実性が確認されたといつてよいと思いません。

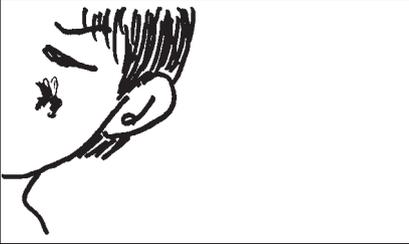
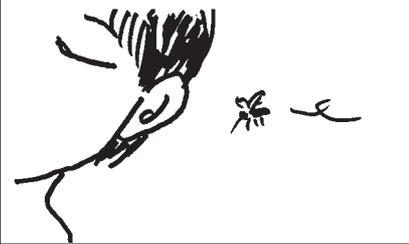
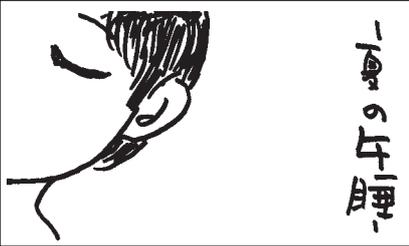
早鳥鏡正先生の「大無量寿経の現代的意義」を読んで驚いたことがあります。「大経」上巻に釈尊の「五徳瑞現」といわれる一段があります。親鸞聖人はこの文あることによつて「大経こそが釈尊出世本懐の経典である証拠とされた重要な一段です。そこに「今日世尊、住奇特法」「今日世雄、住仏所住」「今日世眼、住導師行」「今日世英、住最勝道」とあります。ここに「住」と翻訳された言葉が、原典たるサンスクリット本では「ビハール」というのだそうです。ビハールとは「身心の安らぎ・くつろぎ」の意味ですが、まさに釈尊のお姿は光り輝き、慈しみに満ち、山のごとくどっ

先日飛行機に乗り、久しぶりに旅行を致しました。旅の楽しみは食事、風景への感動、人との出会い、などありません。飛行機の座席でイヤホンを付けて音楽を聞こうと操作をしていますと、隣の座席の人が話しかけてきました。年令は七五歳前後に思われる男性でした。話をしているうちに、私が「お元気でいいですね」と言いますと「実は、私は、病気をかかえているのです。家にいますと、いるんことを考えて気が弱くなつてしまいます。こうして、旅行をしている時が嬉しいのです。しかも今回は、娘が出張先で用事があるものから、娘の子、つまり隣に居る孫の世話をするためです」と笑顔で話されました。その方は続けて「いつ、旅先で迷惑をかける事態になるか心配はありますが、できるだけそのような事態を避けるため、食事や飲み水に配慮しています」とも語られました。話し方や動作にひとつも病気を感

じさせぬ姿に感動を覚えました。わたしも、「病気や悩みを抱いてもそのようにありたい」と教えられた出会いでした。

あとがき

みちちゃん



わたくしも、「病気や悩みを抱いてもそのようにありたい」と教えられた出会いでした。